News Release
第一生命保険株式会社
〒100-8411 東京都千代田区有楽町 1-13-1
The Dai-ichi Life Insurance Company, Limited
13-1, Yurakucho 1-chome, Chiyoda-ku,
Tokyo 100-8411, Japan
www.dai-ichi-life.co.jp

一生涯のパートナー
第一生命

2015年11月10日

11月第3日曜日の前後1週間は「家族の週間」子どもと会話や余暇を楽しんでいますか？

～『ライフデザイン白書 2015年』調査より～

第一生命保険株式会社（社長 渡邉 光一郎）のシンクタンク、株式会社第一生命経済研究所（社長 矢島 良司）では、全国の18～69歳の男女7,256人に対して「今後の生活に関するアンケート調査」を実施し、その分析結果を元に『ライフデザイン白書 2015年』を発刊いたしました。

内閣府は11月の第3日曜日を**「家族の日」**、その前後1週間を**「家族の週間」**と定め、この期間を通じ、生命を次代に伝え育んでいくことや、子育てを支える家族と地域の大切さを再認識するよう呼びかけています。そこで「家族の週間」にちなみ、親子関係に関するデータをご紹介します。

なお本リリースは、当研究所ホームページにも掲載しています。

URL　http://group.dai-ichi-life.co.jp/cgi-bin/dlri/ldi/total.cgi?key1=n_year

≪調査結果のポイント≫

子どもと会話や余暇を楽しんでいるか（P. 2）

- 「子どもと余暇や休日を一緒に楽しんでいる」父親・母親が増えている

「子どもとはよく会話をしている」人の割合（P. 3）

- 「子どもとはよく会話をしている」人の割合は末子が高校生の父親では約半数に低下

子どもと学校や友だち、将来について話すか（P. 4）

- 「子どもと子どもの将来や進路のことについて話す」割合は父親・母親ともに末子が中学生の家庭が最も高い

子どもと異性の友だちや性について話すか（P. 5）

- 「子どもと妊娠・出産・性について話す」人の割合は高校生以下の子どもがいる父親の1割以下、母親の2割前後と低い

子どもと余暇や休日を一緒に楽しんでいる人の割合（P. 6）

- 「子どもと余暇や休日を一緒に楽しんでいる」人の割合は子どもの学齢が上がるほど低くなる

つきあいを深めたい人は家族から友人へ？（P. 7）

- 高校生以下の子どもがいる父親は「家族」と最もつきあいを深めたいと思っているが、母親は子どもが大きくなると「友人」の存在も大きくなる

＜お問い合わせ先＞
㈱第一生命経済研究所 ライフデザイン研究本部
研究開発室 広報担当（津田・新井）
ＴＥＬ．03－5221－4771
ＦＡＸ．03－3212－4470
【URL】http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/index.html

DAI-ICHI LIFE RESEARCH INSTITUTE INC.

≪調査実施の背景≫

当研究所では 1995 年から、生活者の意識と行動の変化を捉えるべく「今後の生活に関するアンケート」調査を実施し、『ライフデザイン白書』として発刊してきました。今回で８回目となる 2015 年版は、ライフデザインを形成する６つの領域、「家族」「地域」「消費」「就労」「健康・介護」「人生設計」について、人々の意識と実態をまとめています。

このうち本リリースでは「家族の日」にちなんで、高校生以下の子どもがいる人（1,993 人）を分析対象として、子どもとの会話や余暇の過ごし方など親子関係についての結果を紹介します。

※本リリースで使用するデータは、当研究所が『ライフデザイン白書 2015 年』を発行するにあたって実施した「今後の生活に関するアンケート」調査のデータです。『ライフデザイン白書 2015 年』については、最終頁にご案内があります。また、調査結果の一部は以下でも紹介しております。
ニュースリリース「『ライフデザイン白書 2015 年』の概要」2015 年７月
http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/pdf/ldi/2015/news1507.pdf

≪「今後の生活に関するアンケート」の概要≫

調査対象	全国の満 18～69 歳の男女個人
調査実施期間	2015 年１月 29 日～30 日
抽出方法	調査機関の登録モニター約 118 万人から国勢調査に準拠して 地域（10 エリア）×性・年代×未既婚別にサンプルを割付
調査方法	インターネット調査
有効回答数	7,256 サンプル
調査機関	株式会社マクロミル

≪分析対象者の主な属性≫

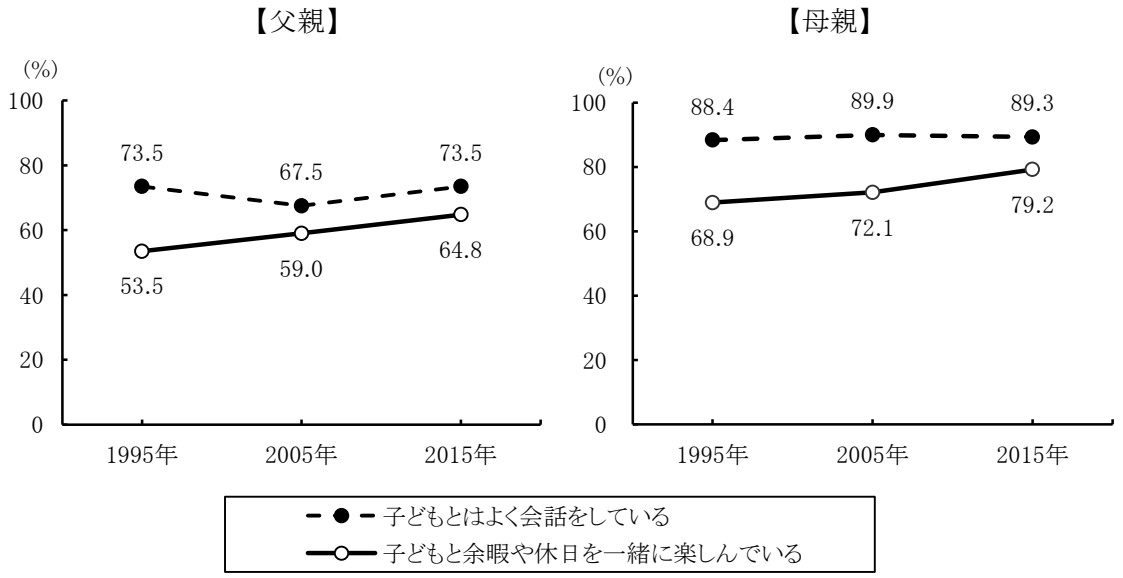
		%
高校生以下の子どもがいる人(1,993 人)		100.0
性別	男性	50.5
	女性	49.5
年代	29 歳以下	10.0
	30 代	36.2
	40 代	38.1
	50 代	12.7
	60 代	3.0

DAI-ICHI LIFE RESEARCH INSTITUTE INC.

子どもと会話や余暇を楽しんでいるか

「子どもと余暇や休日を一緒に楽しんでいる」父親・母親が増えている

図表１ 「子どもとはよく会話をしている」と「子どもと余暇や休日を一緒に楽しんでいる」人の割合（父母別）



注１：高校生以下の子どもがいる人対象
注２：選択肢は「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」「どちらともいえない」「どちらかといえばあてはまらない」「あてはまらない」であり、このうち図表の数値は「あてはまる」と「どちらかといえばあてはまる」の合計

子どもと会話や余暇を楽しんでいる人の割合について、1995 年調査から 10 年おきに時系列変化をみたものが図表１です。

「子どもとはよく会話をしている」に回答した人は、父母ともに 1995 年調査からあまり大きな変化はありません。父親は 2005 年で若干低下しましたが、2015 年には 1995 年の水準に戻っています。20 年前から、父親よりも母親のほうが子どもと会話をしている人の割合が高いことも変わっていません。

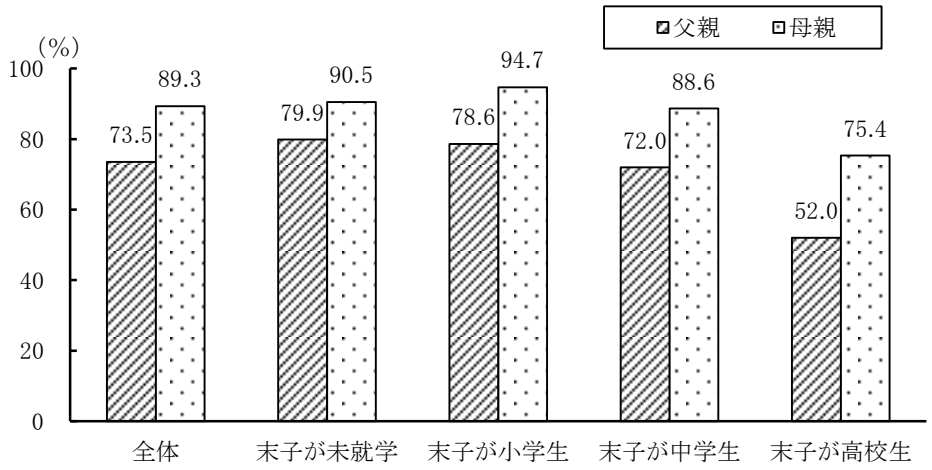
他方、「子どもと余暇や休日を一緒に楽しんでいる」に回答した人は、父母ともに増加しています。その背景には、1992 年９月から段階的に実施された学校週５日制（2002 年度からは完全学校週５日制）の導入といった子どもの生活時間の変化のみならず、週休２日制の普及など親の働き方の変化があると思われます。ただし、子どもとの会話同様に、父親の回答割合が母親を下回っていることは 20 年前から変わりがなく、父子関係よりも母子関係のほうが強い様子がうかがえます。

DAI-ICHI LIFE RESEARCH INSTITUTE INC.

「子どもとはよく会話をしている」人の割合

「子どもとはよく会話をしている」人の割合は
末子が高校生の父親では約半数に低下

図表２ 「子どもとはよく会話をしている」人の割合（父母・末子の学齢別）



注：選択肢は「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」「どちらともいえない」「どちらかといえばあてはまらない」「あてはまらない」であり、このうち図表の数値は「あてはまる」と「どちらかといえばあてはまる」の合計

「子どもとはよく会話をしている」人の割合は、末子の学齢別にみると、どのように変化するでしょうか。2015 年の調査結果について、「子どもとはよく会話をしている」と回答した人の割合を、父母・末子の学齢別にみたものが図表２です。

全体的に父親よりも母親のほうが割合は高いですが、末子の学齢が上がるにつれて、父母の回答割合の差が開いていきます。末子が未就学の家庭では、母親は９割、父親も８割近くがよく会話をしていると回答していますが、徐々に回答割合の差がひらき、末子が高校生の家庭になると母親は７割台を維持していますが、父親は約半数にまで低下し、その差が 20 ポイント以上となっています。

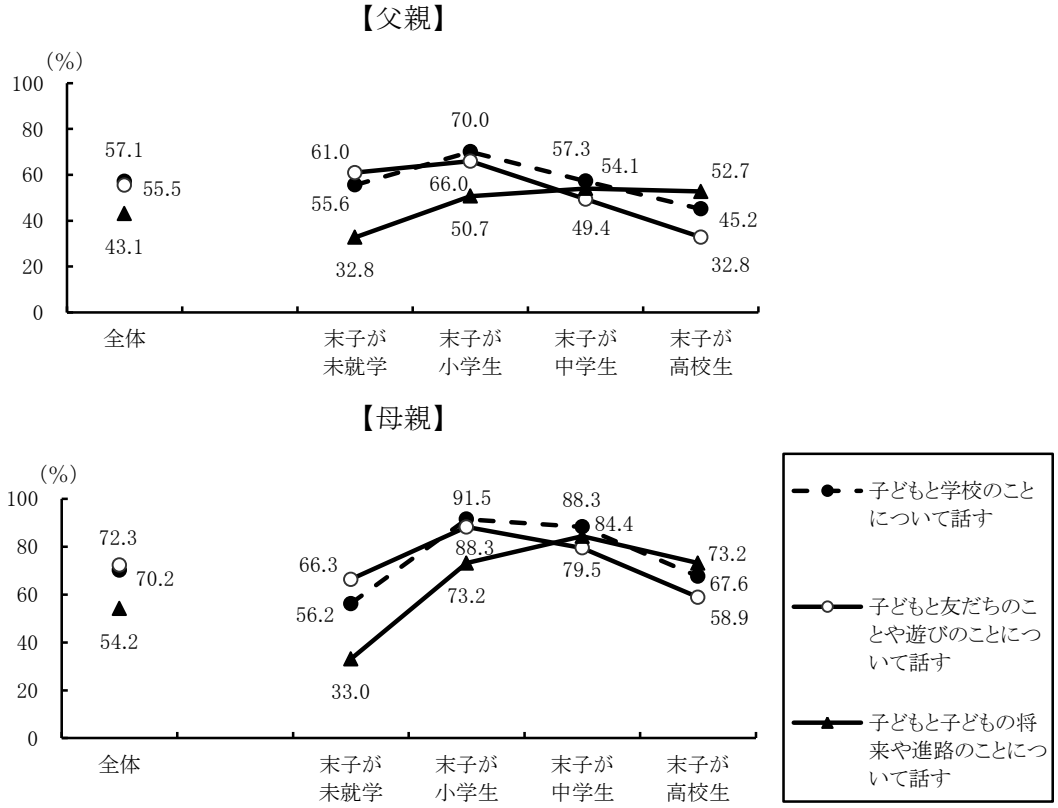
母親は末子の学齢にかかわらず子どもとよく会話をする人が多いですが、父親の場合は子どもが大きくなるにつれて子どもと会話をする人が少なくなります。

DAI-ICHI LIFE RESEARCH INSTITUTE INC.

子どもと学校や友だち、将来について話すか

「子どもと子どもの将来や進路のことについて話す」割合は父親・母親ともに末子が中学生の家庭が最も高い

図表３　子どもと学校や友だち、将来について話すか(父母・末子の学齢別)



注１：選択肢は「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」「どちらともいえない」「どちらかといえばあてはまらない」「あてはまらない」であり、このうち図表の数値は「あてはまる」と「どちらかといえばあてはまる」の合計
注２：「末子が未就学」の家庭も「子どもと学校のことについて話す」への回答割合があるが、これは上にきょうだい（兄や姉）がいるためと考えられる

高校生以下の子どものいる親は、子どもとどのような話をしているでしょうか。ここでは学校や友だちのこと、将来の進路について話をしている人の割合を紹介します。

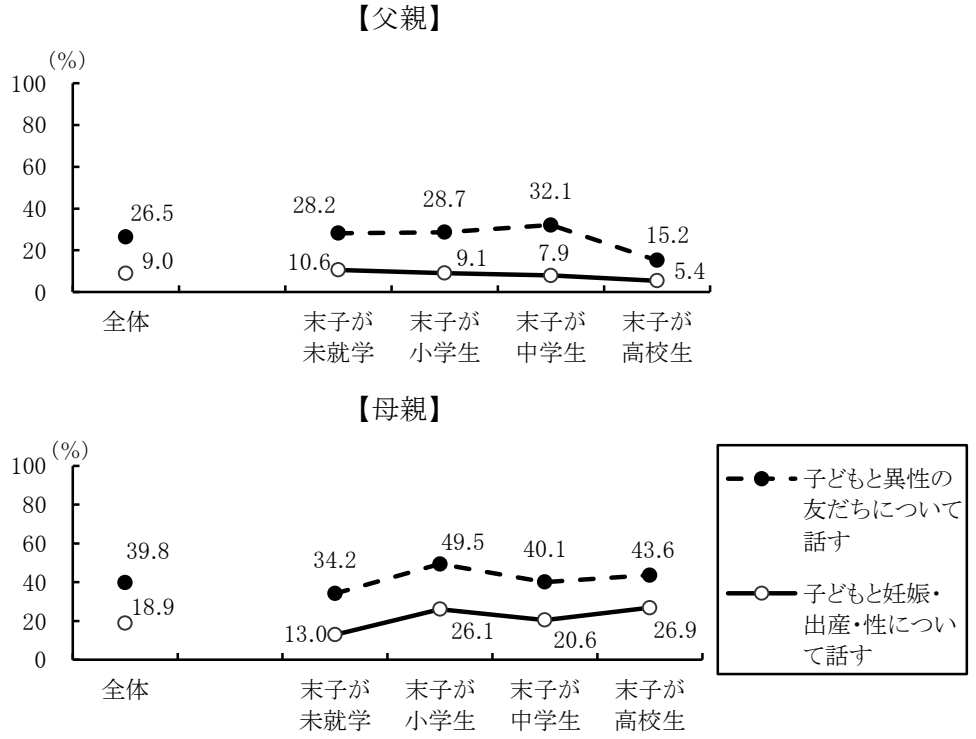
父母・末子の学齢別にみますと、父母ともに「子どもと学校のことについて話す」と「子どもと友だちのことや遊びのことについて話す」は末子が小学生の家庭が高い割合となっています（図表３）。また、「子どもと子どもの将来や進路のことについて話す」は末子が中学生の家庭が高い割合となっています。子どもとの会話の内容は子どもの年齢によって異なり、子どもが大きくなると、学校や友だちの話よりも、将来の進路についての話をする人のほうが多くなることがわかります。全体的に父親は母親よりも回答割合が低いですが、末子が高校生では父親も半数以上が子どもと進路についての話をすると答えています。

DAI-ICHI LIFE RESEARCH INSTITUTE INC.

子どもと異性の友だちや性について話すか

「子どもと妊娠・出産・性について話す」人の割合は
高校生以下の子どもがいる父親の１割以下、母親の２割前後と低い

図表４　子どもと異性の友だちや妊娠・出産・性について話すか（父母・末子の学齢別）



注：選択肢は「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」「どちらともいえない」「どちらかといえばあてはまらない」「あてはまらない」であり、このうち図表の数値は「あてはまる」と「どちらかといえばあてはまる」の合計

生命を次代に伝え育むことの大切さを子どもに伝えるためには、親子で結婚や妊娠、性についての話をするなど、家庭の役割も大きいと思われます。

そこで子どもと異性の友だちや妊娠、出産、性についての話をするかをたずねた結果、「子どもと異性の友だちについて話す」（以下「異性の友だち」）は父親全体 26.5％、母親全体 39.8％、「子どもと妊娠・出産・性について話す」（以下「妊娠・出産・性」）は同 9.0％、18.9％であり、全体的に図表３のような学校や友だちなどの話題よりも回答割合が低くなっています（図表４）。父母・末子の学齢別にみますと、特に父親が低く、「異性の友だち」は末子が中学生まで３割前後、高校生になると 15.2％です。「妊娠・出産・性」は全体的に１割以下です。母親のほうが高いですが、それでも「異性の友だち」は全体的に４割前後、「妊娠・出産・性」は２割前後です。

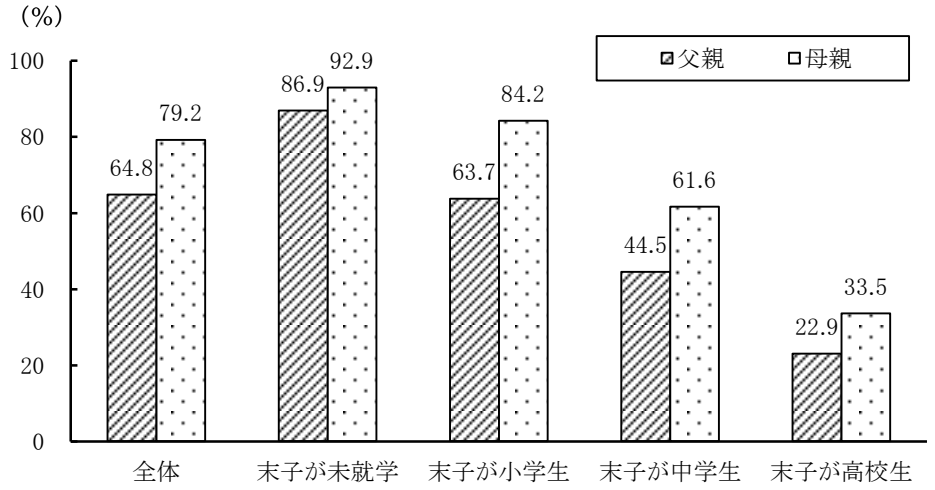
親子でこうした話題を共有することの難しさが示されています。結婚や妊娠など家族を形成し生命を育むことの大切さを子ども達に伝えるために今後、学校教育と連携するなど、さらなる工夫が必要と思われます。

DAI-ICHI LIFE RESEARCH INSTITUTE INC.

子どもと余暇や休日を一緒に楽しんでいる人の割合

「子どもと余暇や休日を一緒に楽しんでいる」人の割合は子どもの学齢が上がるほど低くなる

図表５ 「子どもと余暇や休日を一緒に楽しんでいる」人の割合（父母・末子の学齢別）



注：選択肢は「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」「どちらともいえない」「どちらかといえばあてはまらない」「あてはまらない」であり、このうち図表の数値は「あてはまる」と「どちらかといえばあてはまる」の合計

図表１で「子どもと余暇や休日を一緒に楽しんでいる」と回答した人（以下「子どもと余暇を楽しんでいる人」）が増えていることを示しましたが、これについて 2015 年の調査結果を父母・末子の学齢別にみたものが図表５です。

子どもと余暇を楽しんでいる人は、父母ともに子どもの学齢が上がるほど少なくなっています。それは、子どもが大きくなると、子ども自身の友人ネットワークが広がり、親よりも友だちと過ごすことが多くなるためであると思われます。

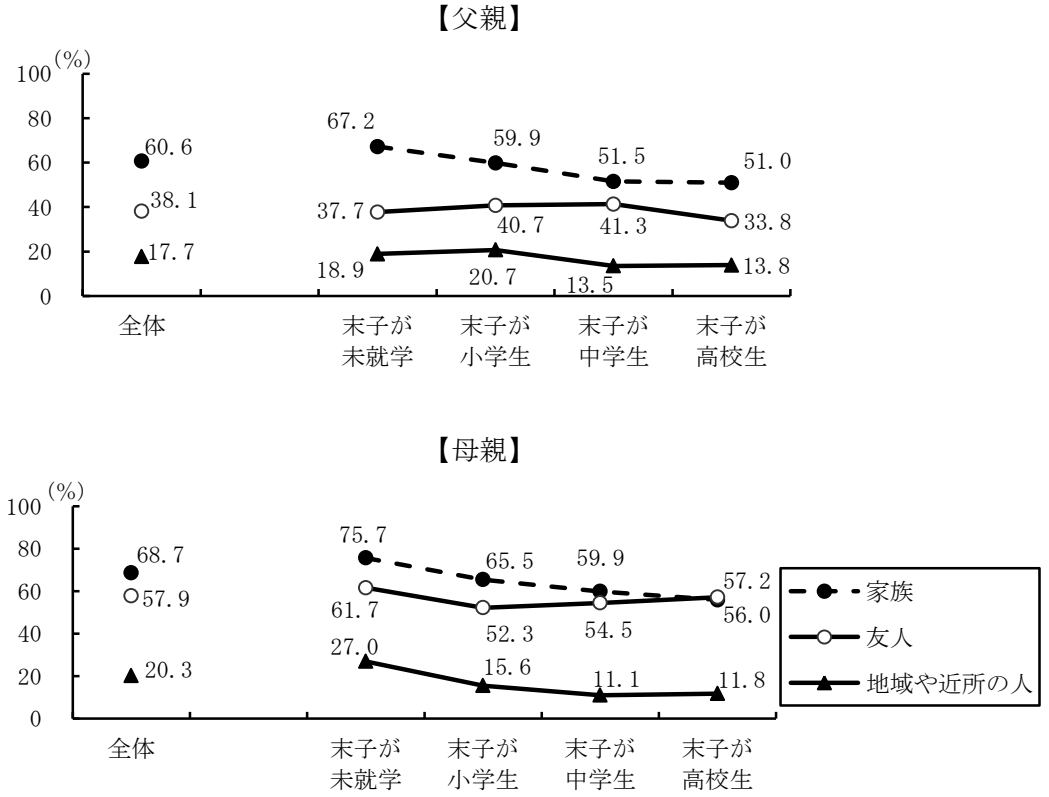
また、子どもの全学齢を通じて、父親よりも母親のほうが子どもと余暇を楽しんでいる人が多いです。末子が未就学のときは父母の差は小さいですが、末子が小学生になると、その差は 20.5 ポイントに広がっています。末子が小学生になるころの父親は、ちょうど職場での責任が重くなり仕事が忙しくなる年齢に差しかかる人が多くなり、ワークライフバランスが難しくなることもその一因であると思われます。

DAI-ICHI LIFE RESEARCH INSTITUTE INC.

つきあいを深めたい人は家族から友人へ？

高校生以下の子どもがいる父親は「家族」と最もつきあいを深めたいと思っているが、母親は子どもが大きくなると「友人」の存在も大きくなる

図表６　今後、人間関係やつきあいを深めていきたい人（父母・末子の学齢別）＜複数回答＞



注：「家族」は「配偶者」「子ども」「自分の親」「配偶者の親」「兄弟姉妹」のいずれかを回答した人であり、「友人」は「学校・学生時代の友人（同窓生含む）」「趣味や習いごとを通じての友人」「配偶者を通じての友人」「子どもを通じての友人」「その他の個人的友人」のいずれかを回答した人である。この他、選択肢には「職場や仕事関係の人（元同僚含む）」「その他の親族」「誰もいない」があるが、表記は省略した。

最後に、「今後、人間関係やつきあいを深めていきたい人」をたずねた結果を紹介します（図表６）。多くの子育て世代にとって「家族」はどのような存在でしょうか。

父母・末子の学齢別にみると、「家族」を挙げた人の割合は、末子の全学齢を通じて、父親よりも母親のほうが高いですが、父親はいずれの学齢でも「家族」が第１位となっています。一方、母親は末子が高校生になると、若干ですが「友人」のほうが「家族」を上回ります。

高校生以下の子どもがいる父親にとって、いつも「家族」は最もつきあいを深めていきたい存在ですが、母親にとっては子どもの学齢が高くなるにつれて必ずしも「家族」が第一ではなくなり、「友人」の存在も相対的に大きくなっていくようです。

DAI-ICHI LIFE RESEARCH INSTITUTE INC.

≪研究員のコメント≫

以上、高校生以下の子どもがいる人の子どもとの会話や余暇の過ごし方など親子関係についてみてきました。

まず、「子どもとよく会話をしている」と答えた人の割合（会話率）は 20 年前から大きな変化はなく、父親は７割台、母親は９割近くを占めており、多くの人が日常的に子どもとよく会話をしていることがわかりました。

ただし、全体的に父親より母親のほうが子どもと会話をしている人が多いです。子どもの学齢が上がるにつれて徐々に会話率が低くなりますが、それでも一貫して父親よりも母親のほうが上回っています。

話題に注目しますと、父母ともに、末子が小学生の家庭までは友だちや遊びについての話が多いようですが、末子が中学生以上になると子どもの将来や進路についての話がこれを上回ります。子どもの学齢によって話題も異なってくることがわかります。父親は母親よりも全体的に会話率が低いのですが、末子が高校生では子どもと進路についての話をする父親が半数以上おり、よき相談相手となっているようです。

他方、異性の友だちのことや妊娠・出産・性については、あまり家庭内で話題にされないようです。特に父親で子どもと妊娠・出産・性についての話をする人は極少数です。家族を形成し生命を育むことの大切さを子ども達に伝えることの役割を家庭も担う必要があると思いますが、そのためには学校教育との連携などさらなる工夫が求められます。

次に、「子どもと余暇や休日を一緒に楽しんでいる」と答えた人（「子どもと余暇を楽しんでいる人」）の割合については、この 20 年間で増加がみられました。

ただし、会話率と同様、全体的に父親よりも母親のほうが子どもと余暇を楽しんでいる人が多いです。父子関係よりも母子関係のほうが緊密であることがうかがえます。

また、子どもの学齢が上がるにつれて、子どもと余暇を楽しんでいる人の割合は低下します。子どもの成長とともに子ども自身にもネットワークが形成され、子どもが親ばかりと一緒に余暇を過ごさなくなるためでしょう。実は子どもの成長は親自身の人的ネットワーク形成の転機です。多くの母親はそのことを実感しているようで、末子が中学生の家庭になると自分の「友人」関係を深めていきたいと思う人が多くなり、末子が高校生の家庭ではその割合が「家族」を上回ります。子育てが一段落することもあり、家族以外に目を向け、自らのネットワークを徐々に広げていこうとしている母親が多いことがわかります。一方、父親の場合、つきあいを深めたい相手を「家族」と答えている人が子どもの全学齢を通じて最も多いです。社会に出ていて家庭以外のつきあいが多い父親の場合は逆に、子どもが成長しても家族とのつながりをより大事にしたいと思っている人が多いことがうかがえます。

この「家族の日」をきっかけにして、みなさまにとって家族とは何か、また子どもとの関係を見つめ直してみてはいかがでしょうか。

（研究開発室 上席主任研究員 的場康子）

DAI-ICHI LIFE RESEARCH INSTITUTE INC.

≪書籍のご案内≫

【編：第一生命経済研究所】
『ライフデザイン白書 2015』

2015 年 7 月に『ライフデザイン白書 2015』（編：第一生命経済研究所、発行：ぎょうせい）を発刊しました。本書は、第一生命経済研究所が独自に実施している全国規模のアンケート調査をもとに、生活者の視点で生涯設計を考え、人々の生活実態や生活意識を時系列で分析したものです。今回の白書も、**図表を多く取り入れ、よりわかりやすく見やすい内容**にしています。

高校や大学における**社会科・家庭科・ライフデザイン学科の学習教材であると共に、記事などの裏づけ資料としてもご活用できる一書となっています。**皆さまの生活に役立つ内容が盛り込まれていますので、ご一読いただければ幸いです。

DAI-ICHI LIFE RESEARCH INSTITUTE INC.